

『李卓吾先生批評西遊記』の版本について

上原 究 一

はじめに

百回本『西遊記』の明刊本は「華陽洞天主人校」系と「李卓吾批評」系とに分けられる。前者には現存最古の百回本で萬曆二十年（一五九二）金陵世德堂初版の文繁本である世德堂本各種及びそれを底本とする文簡本の『唐僧西遊記』と楊閻齋本（清白堂本とも）とが屬し、後者には李卓吾に假託した批評を持つ文繁本『李卓吾先生批評西遊記』（李卓吾評本）各種とその批評を受け繼ぐ文簡本の閻齋堂本とが屬す。

李卓吾評本は太田辰夫氏により甲本・乙本・丙本の三版に分類されている。太田氏は「李卓吾本の本文は世德堂本とほとんど差がなく、兩者は同一のものでいい」と、「明刊諸本はいずれも世德堂本から出ており、したがって西遊記成立史上において独自の價値を有するものではない」（共に太田註（2）書二六一頁）と言いい、「華陽洞天主人校」系と「李卓吾批評」系という區分も形式的で意味が無いものとする。

李卓吾評本の本文は、確かに殆どの箇所では世德堂本に對して細かい字句の變更や誤脱がある程度に止まる。しかし、詳しくは別稿で述

べる豫定だが、世德堂本以下「華陽洞天主人校」系版本と李卓吾評本以下「李卓吾批評」系版本の間には、第九十九回に見える唐僧一行が取經の途上で遭遇した厄難のリスト「聖僧歷難簿」が全く異なるという質的に重要な相違がある。そして、清刊諸本がいずれも李卓吾評本のそれを引き繼いでいるため、李卓吾評本は『西遊記』版本演變史において独自の重要な位置を占めると評價すべきものである。

となれば、甲本・乙本・丙本のうちどれが最も李卓吾評本の初刻本に近いのかを探る作業も大きな意義を持つであろう。既に大陸の吳聖昔氏が甲本と乙本の先後を検討しているが、丙本には一切觸れていない。そこで、本稿では丙本も含めた三者の關係を明らかにしたい。

また、『三國演義』と『水滸傳』にも、李卓吾のものと同稱する批評を持ち、版式が李卓吾評本『西遊記』に酷似する版本が複数存在する。具體的には『三國演義』の劉君裕本・吳觀明本・綠蔭堂本・藥光樓本・三槐堂本・寶翰樓本などと、『水滸傳』の容與堂本各種・百二十回本各種・不分卷百回本各種である。『西遊記』も含め、これらには(一)本文は各作品の文繁本に屬す、(二)全百回または百二十回、(三)毎回二句の回目を持つ、(四)一葉表裏各一幅の圖を毎回一幅（容與堂本以外

の『水滸傳』が該當)または二幅ずつ持つ、(五)本文は半葉十一行二十二字(容與堂本『水滸傳』のみ該當)または十行二十二字、(六)眉批か行間傍批の兩方(『水滸傳』が全て該當)または一方と回末總批とを備える、(七)第一回は書名、第二回は回数、第三回は回目、第四行から正文に入る、(八)何らかの形で評者が李卓吾だと謳う、という共通點がある。以下、(一)～(八)を全て充たす版本を李卓吾評本四大奇書と總稱する。

近年、金文京氏が註(5)擔當項目で北京大學本『水滸全傳』(百二十回本)・劉君裕本『三國演義』・内閣文庫本『西遊記』(甲本)を「姉妹本」と推定し、それを受けて廣澤裕介氏がそれらの刊行の背景を考察されるなど、李卓吾評本四大奇書の横の繋がりを捉えようとする研究が現れ始めた。白話小説というジャンルや四大奇書という概念の形成・發展史を考える上で有用な、今後の進展が期待される分野と言えよう。

しかし、作品間の横の繋がりの考察は、各作品の諸版本の縦の關係が高い精度で確認された上でのものでなければ足元が搖らいでしまう危険を孕む。例えば、笠井註(7)論文で「北京大學本『水滸全傳』は萬曆四十二年袁無涯原刊本である」という通説が完全に否定され、それが實際には崇禎刊本だと示されたため、廣澤註(9)論文には既に修正を要する點が生じている。そして、廣澤氏は『西遊記』については太田説を鵜呑みにするのみで、甲本しか考察對象としていない。よって、本稿では甲本・乙本・丙本の縦の關係の考察を進めると共に、李卓吾評本四大奇書としての横の視點からも各々の位置付けを考えてみたい。

『李卓吾先生批評西遊記』の版本について

第一章 李卓吾評本の傳本と分類

李卓吾評本『西遊記』は甲本・乙本・丙本の三版に分けられるという太田説は、氏が未見の版本も含めて有効である。そこで、本章ではまず三者共通の特徴を擧げ、次いで甲乙丙の順に個々の傳本を紹介し、最後に同系統の批評を持つ閩齋堂本に觸れる。なお、閱覽狀況を特に斷るもの以外は、全て原本閱覽の上で全葉の複寫物を入力している。

一一一、甲本・乙本・丙本の共通點

全て不分卷百回、四周單邊、無界、白口、無魚尾、半葉十行二十二字で、版心葉數は回ごと。每回本文の後に數行の「總批」(「總評」と表記する回も)が二字下げで置かれ、更に「又批」が續く回もある。三者は行款を同じくするので、基本的に同じ回と同じ葉の同じ行には同じ文字が竝ぶ。卷首題は全て『西遊記』だが、甲本と乙本が行頭から空白無く記すのに對し、丙本は行頭から七文字分の空白の下に「西遊記」である。また、版心題も甲本と乙本は行頭から空白無く「西遊記」だが、丙本のみ五文字分の空白の下に「西遊記」である。なお、『李卓吾先生批評西遊記』という通行の書名は三者に共通の目録題で(但し一本だけ例外あり)、甲本と丙本では第百回の卷末題でもある。乙本は甲本・丙本の第百回最終葉を省略するため、卷末題は見えない。

一一二、甲本

①國立公文書館内閣文庫藏本〔内閣李本〕

封面缺。幔亭過客「題辭一／凡例／目錄／圖百葉二百幅／本文。原則行三字の眉批を持つ(ごく稀に行四字や行二字の眉批もある)。題

辭の幔亭過客とは袁于令（二五九二—一六七四）の號で、署名の下にはその別號「白賁」の陽印と「字令昭」の陰印とが印刷される。圖中に「卓然」（第二回裏）、「君裕刻刻」（第七回裏）、「湯維新摹」（第七十一回表）、「劉升伯刻」（第八十二回表・第八十五回表）、「旌德郭卓然鐫」（第百回表）という刻工名が見える。上海古籍出版社「續修四庫全書」、天一出版社『明清善本小說叢刊』、周文業編『古代小説數字化プログラム二〇〇八年版』に影印を収め、岩波文庫邦譯の底本でもある。

②慶應義塾圖書館藏本〔奥野李本〕

故奥野信太郎氏舊藏。封面缺。幔亭過客「題辭」／目錄／圖百葉二百幅／本文。題辭と圖は①と同版で、圖中の刻工名も全て同じ。本文は基本的に①と同じ版木による後印だが、細かな修訂の施された葉があるほか、多くはないが異版の葉も混じっている。目錄は①と完全に異版で、現存の李卓吾評本で唯一目錄題を『李卓吾先生批評西遊記眞本』とし、回目を全て本文内でのそれに一文字の相違も無く一致させている。題辭・目錄・圖を収める首冊が行方不明で、その部分は慶應義塾圖書館所藏のマイクロフィルムのみによった。

一一三、乙本

③宮内廳書陵部藏本〔書陵部李本〕

封面／幔亭過客「題辭」／目錄／本文。圖は各回本文の前に一葉二幅ずつ挿入されるが、第二十六回以降は圖を缺く。圖柄は甲本と全く同じだが、①②に共通の匡郭の割れなどに注意して見比べると、極めて精緻な覆刻だと分かる。第二回裏と第七回裏には甲本と同じ刻工名が見えるが、先行版本の圖中の刻工名まで覆刻する例は不分卷百回本

『水滸傳』でも知られている（笠井註（7）論文參照）。本文も甲本とは異版で、批語が全て眉批ではなく行間の傍批となっている。しかし、本文の行款は甲本と同じで、字句の異同も少なく、字體はおろか文字の傾きまでしばしば一致する。批語もほぼ全て甲本に見えるものである。よって、基本的に甲本をかぶせ彫りした上で、眉批だけはかぶせ彫りはせずに全て行間傍批に移し變えたものだろう。題辭も甲本の覆刻。封面は右から「李卓吾先生原評／西遊記／三行にわたる宣傳文」の三欄に區切り、中央上に龍二匹の繪の陽刻圓印、右下に作中のキードの一つ「心猿意馬」の陰刻長方印がそれぞれ朱で捺される。

④故田中謙二氏藏本〔田中李本〕

原本未見。小川環樹『中國小説史の研究』（岩波書店、一九六八）七四頁所載の封面と圖一幅（第七回裏）の書影を見たのみ。封面は③と同版で、印まで一致する模様。太田註（2）論文によれば③の同版本で、甲本と同じ圖柄の百葉二百圖が目錄の次にまとめて置かれること以外全て③に同じ。しかし、より早く紹介した田中巖氏は、丙本と同じ「批點西遊記序」もあるとする。憶測ながら、他の乙本の特徴からは太田氏の記述が正しいと考える方が理解しやすい。また、太田氏は圖中の刻工名は第二回裏と第百回表に甲本と同じものがあるのみとするが、田中氏は逆に前述の書影でも確認出来る第七回裏のそれのみ挙げる。こちらは他の乙本の状況から見て、實際にはその三箇所いずれにもあり、かつそれで全てと見て良さそうだ。

⑤河南省圖書館藏本〔河南李本〕・⑥中國歷史博物館藏本〔歷博李本〕

どちらも太田氏未分類で、筆者も共に原本は未見。兩者を補配したと稱する影印本（中州書畫社、一九八三）を利用したほか、河南省圖書館で⑤のマイクロフィルムを閲覧した（複寫未入手）。その際に、

影印本は⑤⑥が不規則に混在していること、⑤⑥はどうかやら同版で、しかも題辭・目錄・圖・本文の全てが基本的に③とも同版らしいことが確認出来た(封面は⑤⑥とも缺)。但し、第一回第一・二葉など、③のみ異版の葉もごく稀に存在する。同版の葉の匡郭の傷の状態から見て、③の方が⑤⑥より印刷が早い。⑤の書誌事項はマイクロを見る限り封面を缺く以外は太田氏の紹介による④に同じ。一方、補配影印本では③のように圖が各回の本文の前に一葉ずつ配されており、⑥がそうなのか、影印の際の處置かは不明。圖中の刻工名は、マイクロでも補配影印本でも第二回裏・第七回裏・第百回表に甲本と同じものがある。

⑦パリ國立圖書館藏本〔パリ李本〕

太田氏未分類で、磯部彰氏がこの系統に分類された。筆者は同館未訪で原本未見ながら、マイクロフィルムからの複寫物を閲覽したことがある。封面／幔亭過客「題辭」／目錄／圖五十九葉百十八幅(第六十回以降缺)／本文(第一―二回缺)。封面は右枠と中央枠が字體まで③④に酷似するもののそれとは異版で、左枠には宣傳文ではなく「金陵大業堂重梓」とだけあり、右下に「蘊古堂藏書」の方印が捺される。封面以外の箇所は③⑤⑥と同版。印刷は匡郭の傷などから見て③とほぼ同時期のように、強いて言えば③より僅かに早いかもしれないと感じた。圖中の刻工名は第二回裏と第七回裏に甲本と同じ名が見える。

⑧磯部彰氏藏本〔磯部李本〕

太田註(2)書刊行時には未發見で、磯部氏がこの系統に分類された(磯部註(13)書第七章)。李氏朝鮮の文人朴氏の舊藏で、朝鮮表紙に改装されており、本文のみ存。③⑤⑥⑦と同版(③と⑤⑥とが異版で⑦では缺葉の第一回第一・二葉は共に⑤⑥と一致)だが、版木の

磨耗や損壞が大きく進んでおり、乙本が長期に渡り何度も印刷されていたことが窺える。

一一四、丙本

⑨廣島市立中央圖書館(舊名淺野圖書館)淺野文庫藏本〔淺野李本〕
淺野世本と共に廣島藩淺野家の舊藏。封面／禿老「批點西遊記序」／目錄／圖百葉二百幅／本文。封面は③④と同じ構成かつ同文だが異版で、右下と中央上の印は無く、左下に「書業堂圖章」の陰刻方印が朱で捺される。圖は甲本・乙本とは全く異なるもので、畫工・刻工の名は見えない。本文も甲本とも乙本とも完全な異版で、原則行四字(稀に行三字や行二字)の眉批を持つが、改装された際の天地の裁斷により大部分の葉で眉批の上二―三文字が失われている。版木の割れや印刷のかすれが激しい葉がところどころある後印本である。

⑩廣島大學中國文學語學研究室藏本〔廣大李本〕

封面・序・目錄・圖・本文の全てが⑨と完全な同版で、版木の割れ目や印刷のかすれ具合の一致から印刷もほぼ同時期と見られる。⑩の方が僅かに割れ目が小さい傾向があり、また⑨⑩併せて一〇二八箇所確認出来る眉批のうち、⑩では判讀出来るが⑨では印刷されていないものが五個あって、その逆は一個だけなので、⑩の方が僅かに早く刷られた模様。但し⑨より缺葉が多い。裁斷により眉批の上部が切れている點まで⑨と同様で、裁斷後の外寸(二三・二×一五・三cm)も一致するので、⑨⑩は印刷から收藏に到るまで同経路を辿っていたと思しい。各冊裏表紙に「廿日市蓮教寺」と墨書し、現存する淨土眞宗の寺院の舊藏と知れるが、その前には⑨と共に廣島藩淺野家の所藏だったものかもしれない。封面・序・目錄・圖を収める首冊が二〇〇三年

十一月の筆者調査時點で行方不明だったため、その部分は東京大學東洋文化研究所所藏の寫眞版のみによる。太田註(2)論文は封面印も⑨と同じとするが、田中註(12)論文によれば封面は下三分の一が破れており印は確認不能とのことで、東文研寫眞版は田中氏の記述と一致する。⑨と同じく、圖中に畫工・刻工の名は一切見えない。

一一五、系統不明

①中國國家圖書館(舊名北京圖書館)藏本(國圖李本)

筆者未見。李時人「《西遊記》版本敘略」が李卓吾評本の項で「北京圖書館藏一殘本」とのみ記す。國家圖書館のWEB—OPACには「西遊記『普通古籍』…一百回／(明)吳承恩撰…(明)李贄評、刻本、明、十二冊・圖、十行二十二字白口四周單邊、吳承恩明撰、(明)李贄評、索書號／t3918、館藏・古籍館普通古籍閱覽室」と著録されている。二〇一一年三月に文津街の古籍館で閱覽を申請したところ、索書號がtで始まる本は全て善本に格上げされて、總館の善本閱覽室に移管されたと教えられた。善本閱覽室で訊ねると、移管後の開梱作業が未了とのことで閱覽不能であった。右の書誌情報を見る限り甲本・乙本・丙本のいずれかである可能性が高いが、詳細未詳。

一一六、閩齋堂本(楊居謙本とも)

奥野李本と同じく故奥野信太郎氏舊藏、慶應義塾圖書館現藏。文簡本、上圖下文、二十卷、卷首題「新刻增補批評全像西遊記」、二十卷末に崇禎辛未歲(四年、一六三二)の木記がある。禿老「批點西遊記序」／「新刻增補批評全像西遊記竄言標題目次」／本文。序は丙本と行款は異なるが殆ど同文で、末尾に陽印「禿老批評」と陰印「閩齋堂

楊氏居謙校梓」が印刷される。各卷第二行にも「倣李禿老批評」と記し、李卓吾評本とほぼ同じ眉批(圖中に刻まれ、スペース上の制約からかまます省略あり)と回末總批を持つ。李卓吾評本を底本に楊閩齋本も参照しつつ省略・改訂したものと見られている(磯部註(13)書第六章参照)。

一一七、諸本の關係についての先行研究

筆者が「李卓吾批評」系だと確認出来た傳本は以上である。

さて、太田註(2)論文は、乙本に屬する田中李本につき「要するに内閣文庫本の模刻」だとし、丙本については淺野李本の封面印の「書業堂」を清代の蘇州の書店とみなして、それだけを根據に「おそらく未知の明刊本を繼承する清刊本であろう」と言っている。

③の項で述べた通り、乙本は確かに甲本に基づいて作られたものである。嚴密には註(11)に記した通り内閣李本そのものが底本ではないが、乙本に關する太田説は大筋では正しいと言えよう。

對して、丙本の扱いには問題がある。蘇州の書業堂は清代に限らず萬曆から崇禎にかけても多くの書籍を刊行しているのだ。よって、丙本の刊行時期は全面的な再検討が必要である。

また、「孫旦」・田中註(12)論文・太田註(2)論文はいずれも唯一「凡例」を存する内閣李本を筆頭に挙げており、これが最善・最古だろうというのが事實上通説化している。しかし、丙本と甲本・乙本との先後關係が本格的に考察されていないため、客觀的根據は乏しい。そこで、次章では甲本・乙本・丙本を圖・眉批・本文・版式の四つの面から比較して、三者の先後關係や、『三國演義』や『水滸傳』の李卓吾評本との横の繋がりについて明らかにしてゆきたい。

第二章 二者の先後關係と初刻本の様相

二一、圖の比較から

丙本の圖が甲本・乙本とは全く異なることは既に述べたが、丙本の圖の大半が明らかに世徳堂本の圖を模倣していることを磯部註(13)書第七章が指摘している。紙幅の都合上一例のみ挙げるが、一目瞭然であろう(次々頁圖1・2)。なお、『唐僧西遊記』の圖も同じく世徳堂本の圖を模倣したものが、全八十幅しかない。丙本の圖は全二百幅で、『唐僧西遊記』には無い世徳堂本の圖も多く模倣しているので、直接世徳堂本(初刻本か覆刻本かは不明)に據つたものと見て良い。磯部氏はこの指摘をした上で、なおも甲本の圖の方が丙本に先行するとの立場を取る。しかし、李卓吾評本の本文が世徳堂本を引き継いだものであることを踏まえれば、世徳堂本の圖を直接参照すると思しき丙本の圖が先行し、甲本の獨自性が高い圖はその後から登場したと考える方が自然ではないだろうか。

その推測の傍證となる例が、『三國演義』の李卓吾評本に見られる。その初期のものとしてされる吳觀明本の圖二百四十幅全てが、萬曆十九年(一五九二)刊の周曰校乙本(またはその覆刻本の周曰校丙本)の圖を、『西遊記』の丙本が世徳堂本の圖を模倣するのと同じ手法で利用したものなのだ(次々頁圖3・4)。周曰校乙本『三國演義』と世徳堂本『西遊記』は同じ金陵で刊行され、刊年も一年しか違わず、版式も似通い、上元王氏を畫工とする見開きの圖を持つ(註(1)拙稿参照)點まで共通する。そして、『三國演義』の李卓吾評本では、先行版本の模倣ではない獨自の圖を持つ寶翰樓本や金閭大業堂本が後から現れて来る。

『李卓吾先生批評西遊記』の版本について

となると、『三國演義』でも『西遊記』でも、李卓吾評本の初刻本の圖は萬曆二十年前後の金陵刊本(またはその覆刻本)の上元王氏の手になる圖を模倣したもので、その後から獨自の新たな圖を持つ李卓吾評本が現れたのではないだろうか。つまり、圖について言えば丙本が甲本・乙本より先行する可能性が高いことである。

二二、眉批(乙本のみ傍批)の比較から

甲本・丙本・閩齋堂本の眉批、及び乙本の傍批の数は次々頁表1の通りである。ここから推測出来る内閣李本・奥野李本・乙本の關係については註(11)で觸れた。問題は甲本と丙本の關係だが、丙本の方がかなり眉批が多い。内譚を見ると、内閣李本に無く丙本にあるものが二一八個に上るのに對し、丙本に無く内閣李本にあるものは五八個に止まる。内閣李本が比較的狀態の良い早印本なのに對し、丙本は二本とも後印本である上に、天地の裁斷によつて眉批の有無が確認不能な箇所も少なくない。よつて、もし甲本と丙本を初印本同士で比べることが出来れば、眉批の數の差は更に廣がるものと思われる。一般的に眉批・傍批の類は同系統のものならばより後の版本になるほど數が減る傾向にあるので、丙本の眉批の方が、約二六%も數が少ない内閣李本の眉批よりも、古い形をより良く留める可能性が高いと言つて良いだろう。

また、『三國演義』の李卓吾評本では、吳觀明本・劉君裕本など初期のものとしてされる版本はみな行四字の眉批を持ち、藜光樓本・三槐堂本など行間傍批のものはいずれも清代に入つてから現れたものである。匡郭に守られずに版木の端にある眉批は、保管や運搬の過程で傷みやすい箇所であろうから、眉批が後繼版本で匡郭の内側に移つて行

開傍批となるのは、版本の管理面から見て合理的な變化だと言える。

となれば、『西遊記』の李卓吾評本も同様の経過を辿つたのではなからうか。つまり、丙本を含む初期の版本の行四字の眉批は後印本では損傷が目立つたため、その重刻本の甲本は眉批を行三字に減らして版本の上端から少しでも遠ざけることとなるべく損傷を抑えようとし、その程度では効果が薄かった（奥野季本の眉批は基本的に同版である内閣季本のそれよりも約二一%も数が減っている）ために、乙本は甲本を覆刻しながらも眉批だけはかぶせ彫りせず、全て行開傍批に變えることで損傷を避けた、といった経緯があつたのではあるまいか。

以上、眉批も丙本の方が甲本に先行するものである可能性が高い。なお、閩齋堂本には、甲本には見えず丙本には見える眉批が一四六個ある一方で、丙本には無く甲本にはある眉批も三七個存在し、他本に全く見えない眉批も一七個ある。丙本と甲本で眉批の字句に異同がある場合、閩齋堂本は丙本に一致するのが一六例で、甲本に一致するものは一例だけなので、閩齋堂本の眉批は甲本より丙本に近い。本文の字句にも同様の傾向があるので、閩齋堂本が底本とした李卓吾評本は、⑨⑩よりも早く印刷されて眉批がより多く読み取れた丙本か、もしくは太田氏の言うような「丙本の祖本の明刊本」だつたと思われる。

二一三、本文の比較から

甲乙丙三者の本文には僅かながら文字の異同が見られる。紙幅の都合上、異同箇所が十分にあり全體の傾向を良く反映する第十四回に限り、世徳堂本・丙本・甲本・乙本の異同を全て示す（次々頁表2）。

まず、當然ながら、「李卓吾評本三者（丙本・甲本・乙本）が全て

一致し、世徳堂本はそれとは異なる」例がこの回に限らず最も多い。他の回の例としては、前述の「聖僧歷難簿」の相違がこれに該当するほか、吳聖昔註（3）論文が指摘する甲本・乙本共通の世徳堂本に對する同詞脫文（先行版本で近接した行に複数回現れる同じ字句の間に挟まれた文章を後繼版本が脱落すること）二例と、韻文の中で世徳堂本の丁度一行分を脱落する一例は、全て丙本でも同様に脫文である。

その一方、「世徳堂本と丙本が一致し、甲本・乙本はそれとは異なる」例もかなりの數に上る。他の回の例も一つだけ挙げると、甲本・乙本は共に第三回第六葉表第一行に二文字分のスペースに「相稱没」の三文字を詰め込む箇所があるが、丙本ではそこは「相趁」の二文字のみで、世徳堂本は丙本と一致する。

對して、「世徳堂本と甲本・乙本が一致し、丙本はそれとは異なる」例はごく少なく、しかもその殆どが魯魚の誤りの類の丙本の單純な誤刻で、後繼版本が推測で正しい字に戻せる範圍のものである。

つまり、丙本は世徳堂本と甲本の中間的な本文を持っているのだ。もし假に丙本が「甲本を底本にしつつ、世徳堂本も參照して校訂を加えたもの」だとしたら、甲本が正しいのに丙本が世徳堂本と同じ單純な誤字を犯す例はまず現れないはずだが、實際にはそうした例がかなり見受けられる。逆に、世徳堂本と丙本は正しいが甲本と乙本では誤る例もある。よつて、素直に世徳堂本↓丙本↓甲本↓乙本の順に本文が變遷したと考えれば良いだろう。もう一つ例を挙げて確認しよう。

A. 丙本第五回第五葉裏二〜六行目（次頁圖5）

閣按住雲頭輕輕移步入裡面只見那里

瓊香繚繞瑞鶴繽紛瑤臺鋪彩結寶閣散氤氳鳳翥鸞騰形

縹緲金花玉萼影浮沉上排着九鳳丹霞展八寶紫霓

表2 世徳堂本・丙本・甲本・乙本 本文異同表(第14回のみ)

回・葉・行	世徳堂本	丙本	甲本	乙本	備考
14-1a-3	詩曰	なし	なし	なし	世本のみ見える
14-1a-7	一粒	一粒	一粒	一粒	世本の誤字を丙本以降訂正
14-1a-8	万个	萬法	萬法	萬法	世本より丙本以降の方が勝る
14-1a-9	所迦葉	釋迦葉	釋迦葉	釋迦葉	世本意味不通で丙本以降改める
14-1b-6	凍餓	凍餓	凍餓	凍餓	世本の誤字を丙本以降訂正
14-2a-1	朔腿	樂腿	樂腿	樂腿	丙本の誤字を甲本以降引き継ぐ
14-2a-2	録	緑	緑	緑	世本の誤字を丙本以降訂正
14-2b-2	一救	一救	一救	一人	意味はどちらでも通る
14-2b-4	吊	弔	弔	弔	丙本の誤字を甲本以降引き継ぐ
14-2b-4	願	願	願	願	世本と丙本の誤字を甲本以降訂正
14-2b-10	依言道	依言	依言	依言	世本の衍字を丙本以降削除
14-2b-10	走邇	走一邇	走一邇	走一邇	丙本以降文字を補う
14-3a-4	呢咩	唎咩	唎咩	唎咩	世本の誤字を丙本以降訂正
14-3a-10	監押	監押	監押	監押	意味はどちらでも通る
14-4a-2	相	像	像	像	通用字
14-4a-6	我再與你	我與你再	我與你再	我與你再	丙本以降語順を変更
14-5a-1	幾珠	幾點	幾點	幾點	丙本以降量詞を変更
14-5a-2	斑爛彪	斑爛彪	斑爛虎	斑爛虎	甲本以降若干ニュアンスが変わる
14-5b-2	再縫	再縫	去縫	去縫	意味はどちらでも通る
14-5b-9	那隻虎	那虎	那虎	那虎	丙本以降量詞を削除
14-5b-9	讓你在	讓你在	讓你在	讓你在	丙本以降「讓」の対象を補う
14-6a-2	量於	量於	量于	量于	世本の誤字を丙本以降訂正
14-6a-4	見到	若到	若到	若到	意味はどちらでも通る
14-6a-7	千山	千山	千山	千山	世本の誤字を丙本以降訂正
14-6b-6	莖	莖	莖	莖	世本と丙本の誤字を甲本以降訂正
14-6b-7	方然	方然	方才	方才	意味はどちらでも通る
14-6b-9	不犯天光	不犯天光	不犯天光	不違天光	乙本のみ若干の変更
14-6b-10	就行	就行	便行	便行	意味はどちらでも通る
14-8a-2	唐生	唐姓	唐姓	唐姓	世本の誤字を丙本以降訂正
14-9b-10	鼻嗅愛	鼻嗅愛	鼻嗅愛	鼻嗅愛	世本と丙本の誤字を甲本以降訂正
14-10b-6	禍	禍	禍	禍	世本の誤字を丙本以降訂正
14-11a-9	入了	入了	八了	八了	甲本の誤字を乙本も引き継ぐ
14-11b-3	上不得	上不得	上不得	上不得	世本の脱字を丙本以降訂正
14-11b-3	喏	喏	喏	喏	甲本の誤字を乙本も引き継ぐ
14-11b-7	但	但	畧	畧	意味はどちらでも通る
14-12a-5	大王	大唐王	大唐王	大唐王	丙本以降の方が若干読み易い
14-12a-5	拜活佛	拜佛	拜佛	拜佛	意味はどちらでも通る
14-12b-9	默	點	默	默	丙本のみ字形の類似から誤刻
14-13a-4	云	云	雲	雲	通用字
14-13b-2	那是	那是	因是	因是	意味はどちらでも通る
14-13b-7	齒兒	齒兒	齒兒	齒兒	世本の誤字を丙本以降訂正
14-15a-5	吃个兒	吃些兒	吃些兒	吃些兒	世本の單數形を丙本以降複數形に
14-15b-8	已此	已此	已是	已是	意味はどちらでも通る
14-16a-9	叫	教	教	教	「さけぶ」意なので丙本以降の誤字

※「回一葉一行」は「回数一葉數(a:表、b:裏)一行數」を丙本準據で示す。この回では甲本・乙本も同じ。
 ※異體字のみの相違は除いた。よって、世徳堂本と丙本の間で頻出する「裡」から「裏」、「个」から「個」、「咲」から「笑」、「烟」から「煙」などのような相違はこの表には含めない(なお、世徳堂本のこれらの字が全て丙本以降で書き換えられているわけではなく、そのまま残ることも少なくない)。
 ※字句が誤っている方を網掛けにした。どちらでも意味が通る場合は世徳堂本と異なる方を網掛けとする。

表3 李卓吾の名を冠する明刊本の年ごとの刊行點數

嘉靖45年(1566)	1
萬曆9年(1581)	1
14年	1
18年	3
24年	1
25年	1
27年	3
28年	4
29年	1
35年	1
36年	1
37年	2
38年	3
39年	1
40年	2
41年	1
42年	2
43年	1
45年	1
46年	3
47年	1
48年	1
その他萬曆年間(1573~1620途中)	18
天啓1年(1621)	1
3年	1
その他天啓年間(1621~1627)	8
崇禎13年(1640)	1
その他崇禎年間(1628~1644)	2
明末	2
明(刊行の時期不詳)	26

※林海權「李贄著作及評點、輯選諸書目錄」に基づいて筆者が作成。表に見えない年は全てゼロ。

墩粧綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌

與脛唇珍羞百味般般美異果嘉穀色色新

B. 甲本・乙本第五回第五葉裏二〜六行目（前々頁圖6）

閣按住雲頭輕輕移步走入裡面只見那里

瓊香繚繞瑞靄繽紛瑤臺鋪彩結寶閣散氤氳鳳鸞

騰形縹緲金花玉萼影浮沈上排着九鳳丹霞展八寶

紫霓墩粧綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓

熊掌與脛唇珍羞百味般般美異果嘉穀色色新

改行は底本に従い、傍線と網掛けは筆者による。ここは甲乙丙三者に異同が無く、世徳堂本は網掛けの三箇所で字句が異なるため、甲本と丙本が別々に世徳堂本を参照したとは考えられない。さて、丙本の「瓊香」からの行は二十一字分のスペースに二十三字も詰め込んでいゝ。通常行二十二字で韻文は一字下げるのが甲乙丙三者に共通の體例だが、ここでは傍線部が韻文なので、そこを一字下げにしつつ各行の文字数が通常通りの甲本・乙本の形が正しい處理である。もし甲本が丙本に先行するとしたら、丙本は甲本と同じように彫れば良かったわけだから、このような不自然な改行になるはずがない。後發の甲本が丙本の不自然さを解消したと見て間違ひあるまい。そして、丙本の不自然な改行の原因は、世徳堂本の該箇箇所を見ることで判明する。

C. 世徳堂本卷一第五十二葉裏十一行目〜第五十三葉表三行目

瑤池不多時直至寶閣按住雲頭輕く移步走入裡面只見那

里瓊香繚繞瑞靄繽紛瑤臺鋪彩結寶閣散氤氳鳳鸞翥翔形

縹緲金花玉萼影浮沈上排着九鳳丹霞展八寶紫霓墩

綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌與脛唇珍

羞百味般般美異果嘉穀色色新

『李卓吾先生批評西遊記』の版本について

こちらも改行は底本の通りとした。世徳堂本は行二十四字で、韻文はやはり一字下げるのが體例である。ところが、ここでは韻文の始まる行の本來一字下げるべき箇所に直前の地の文の最後の「一字」をねじ込んでおり、一見しただけでは韻文は次の行の冒頭「縹緲」からであるかのように見える。ということは、丙本の不自然な形は、世徳堂本を直接参照したために韻文は「縹緲」からだ勘違いし、一旦以下のように彫ってしまった名残ではあるまいか。

D. 丙本訂正前の推定形

閣按住雲頭輕輕移步走入裡面只見那里瓊香繚繞瑞

靄繽紛瑤臺鋪彩結寶閣散氤氳鳳鸞騰形

縹緲金花玉萼影浮沈上排着九鳳丹霞展八寶紫霓

墩粧綵描金桌千花碧玉盆桌上有龍肝和鳳髓熊掌

與脛唇珍羞百味般般美異果嘉穀色色新

こう彫ってしまった後で、試し刷りの際か初印本出售後に韻文は「瓊香」からだど氣付いて、「閣按」からの行の下五文字を削り、その次の行全體を埋木改刻する、という最小限の手間で改訂したのが現在の丙本の形だ、と考えるのが最も合理的な解釋だろう。この葉全體を貫く版木の横割れが問題の「瓊香」からの行にだけは入っていないことがこの推測の裏付けとなる（圖5、第三行の「散」字の高さに注目）。この例と前述の丙本の圖が世徳堂本の圖を模倣していることを併せて考えれば、丙本の版木は世徳堂本に直接依據して作られた「李卓吾評本の初刻版」そのものであると推定される。

なお、丙本と甲本・乙本で本文に異同がある場合、清刊諸本は大抵後者と一致する。清刊諸本は概ね甲本・乙本系統から出たようだ。

二一四、版式の比較から

甲本・乙本は第一回以外の第一行は全て回数を書すが、丙本では第一回の他にも十回ごとの第一行に書名またはその痕跡が見える。具體的には、第十一・三十一・四十一回の第一行は文字が全て削られて空白で、第二十一・六十一・七十一回の第一行は第一回と同じ「(七文字空白) 西遊記」と残り、第五十一・八十一・九十一回の第一行が行頭から空白無く「李卓吾先生批評西遊記」となっている。

つまり、丙本は元々第一回から第九十一回まで十回おきに全て第一行に「李卓吾先生批評西遊記」という目録題・巻末題と同じ書名が記されていたが、現存の⑨⑩ではそれが一部を残して削られていて考えられる。『三國演義』の李卓吾評本は管見の限り全て第一回から十回おきの第一行に必ず「李卓吾先生批評三國志」と書名を記している、という事實がこの推測の正しさを裏付けるだろう。

また、丙本は⑨⑩共に第五十二回第三葉・同第四葉・第九十一回第六葉に「李卓吾批評西遊記」という版心題が残っている。よって、他の千五百葉弱の版心題「(五文字空白) 西遊記」は、「李卓吾批評」の五文字を削ったものと見てよい。『水滸傳』の容與堂本が版心題を「李卓吾批評水滸傳」としており、李卓吾の名の削られる前の丙本初版の状態と共通する。なお、初期の容與堂本は全ての回の第一行に「李卓吾先生批評忠義水滸傳卷之〇〇」と書名を記す。また、『三國演義』の李卓吾評本は管見の限り全て版心題が行頭から空白無く「三國志」であり、珍しく丙本と異なる。

つまり、現存の⑨⑩は共に「丙本初版の版本から李卓吾の名を削り取った後修版」による後印本なのだ。以下、⑨⑩がいずれも廣島縣に傳わって来たことを鑑みて、これを假に廣島丙本と呼び、李卓吾の名

が削られる前に刷られた丙本初版本(現存せず)と區別する。

甲本の行頭から單に「西遊記」という没個性な巻首題は、廣島丙本を底本として七文字分の空白を詰めたためにこうなったのであろう。版心題も同様である。もし甲本が丙本に先行するとしたら、丙本は書名を刻した十回ごとの行数をわざわざ底本より一行増やしたことになるが、營利出版物である通俗小説の重刻本でそのような手間とコストのかかる處置をするとは考えにくい。逆に、丙本を底本に甲本が作られたなら、刻字数を減らすことでコストカットを圖つたと理解出来る。

二一五、「竊言」と「凡例」について

ここで付言しておく、閩齋堂本の「批點西遊記序」の次に置かれる「竊言」は、前半は他のどの版本にも見えない文だが、後半が内閣李本のみ備える「凡例」全文と概ね一致する(但し「凡例」より末尾の數句が少ない條あり)。「竊言」は批評の意圖の解説で、實際の批評の方向性と合致するので、李卓吾評初刻本には附されていたと考えられる。つまり、「批點西遊記序」と「竊言」は共に閩齋堂本の底本に備わっていたのだろう。そして、廣島丙本を底本とする甲本が「竊言」の後半に當たる「凡例」を持つということは、廣島丙本の初期印本には「竊言」か「凡例」が備わっていたと考えられる。⑨⑩は廣島丙本の中でも印刷が遅く、それを缺いた状態で出售されたのであろう。

第三章 それぞれの刊行時期

三一、避諱による推定

本章では丙本・甲本・乙本それぞれの刊行時期の推定を試みる。まず、避諱を手掛かりに考えてみよう。明初以來殆ど行われていなかっ

た出版における避諱は天啓五年頃より本格化し、通俗小説でも天啓帝の諱「由校」と崇禎帝の諱「由檢」の「由」「校」「檢」を避ける箇所のある版本が多数知られている。

では『西遊記』においてはどうか。世徳堂本には「由」五九例、「校」三五例、「檢」二八例が見える。丙本の本文では「由」六〇例、「校」三四例、「檢」二八例で、世徳堂本の「校」が「枝」の誤字なのを訂正する一例を除き全て世徳堂本を踏襲し、「由」が一つ増えてさえている。世徳堂本に無い箇所では、眉批には用例が無いが、總批には「由」二例と「檢」一例がある。つまり、丙本はこれらの字を避けてはいない。

對して内閣李本では、第五回第一葉表・同第十葉裏・第二十回第一葉表で「由」が「繇」に、第十七回第九葉表・第二十回第十二葉表（二箇所）・第三十七回第十一葉裏で「校」が「較」に、第十回第九葉裏・第十六回第十三葉裏・第七十一回第三葉裏で「檢」が「簡」に、第九十四回第四葉表で「檢資」が「探視」に變わっており、いずれも埋木改刻の痕跡は見えない。つまり、丙本本文の「由」「校」「檢」合計一二二例のうち一割弱の一一例のみとはいえ、甲本は版木が最初に彫られた時点で天啓・崇禎兩帝の諱を避けているのだ。

となれば、甲本の版木は崇禎年間に彫られたものに違いない。對して、丙本の版木はまだ避諱がうるさく問われなかった天啓年間前半以前に彫られたものである。また、甲本を底本として作られた乙本の刊行は、當然早くても崇禎年間だし、或いは清代に下るかもしれない。前述の通り『三國演義』では乙本と同じ行間傍批形式の李卓吾評本はいずれも清刊本と見られるので、後者の可能性も十分にある。

三二、李卓吾著作への禁令による推定

李卓吾批評と稱する小説・戯曲は假託に過ぎないと古くから言われるが、その中でも同時代的言説として重視されている錢希言『戲報』卷三「贗籍」は、それらが梁溪の人・葉晝の偽作だと斷じた上で、「李卓吾の著作は數年前に彼が罪を得ると當局の命令で版木・書籍とも全て廢棄されたが、近年再び流行し始め、そこで初めて李卓吾批評と謳う小説・戯曲が現れ始めた」との旨を記している。李卓吾著作への禁令發布と彼の入獄は萬曆三十年閏二月で、翌月には獄中で自殺した（『神宗實錄』卷三六九）。『戲報』には萬曆癸丑（四十一年）八月朔の自叙がある。つまり、右で傳えるのは概ね萬曆三十年代の状況である。

表3（一一八頁）は林海權「李贄著作及評點、輯選諸書目錄」の擧げる李卓吾の著作またはその選評と謳う（假託も含む）明刊本の數を刊年ごとに示したのだが、萬曆二十年代後半にはほぼ毎年確認出来る李卓吾の名を冠する書籍の刊行が、萬曆三十年代前半には全く確認出来ない。萬曆三十五年以降は天啓三年まで再びほぼ毎年刊行が確認出来るから、この空白は錢希言の傳える當時の状況と合致すると言える。となれば、この空白期間は版本の傳存状況の偶然的偏りによるものではなく、當時の禁令の影響を反映するものと見て良いだろう。

以上より、李卓吾評本四大奇書の各初刻本の刊行は、禁令の影響が薄れた萬曆三十五年以降かつ『戲報』が出た萬曆四十一年以前と推定する。實際、李卓吾批評を謳う小説・戯曲で刊年の手掛かりがある最も早い版本は、いずれも萬曆三十八年の容與堂本『水滸傳』、同『李卓吾先生批評北西廂記』、起鳳館刊本『元本出相西廂記』である。

また、天啓三年を最後に刊年の分かるものが激減するのも當時の状

況を反映していると思われる。というのも、顧炎武『日知錄』卷十八「李贄」によれば、天啓五年（一六二五）九月にも再び李卓吾の著作への禁令が出されているのだ。顧炎武はこの禁令は結局は効果が無かったと言うが、表3を見る限り少なくとも一時的には効果を發揮したのではなからうか。なお、李卓吾著作への正式な禁令の記録は明代にはこの二回しか確認出来ない。

これらの前提を踏まえて、李卓吾評本『西遊記』各種の刊行時期を推測してみよう。まず、李卓吾評初刻本は萬曆三十五〜四十一年の間の刊行らしい。一方、丙本初版は天啓・崇禎兩帝の諱を避けないことから天啓前半以前の刊行と思われる。兩者が同じものである可能性が高いという前章での結論は、この面からも無理は無い。

また、丙本の版木から李卓吾の名が削られたのは、天啓五年の禁令への対策だったのではあるまいか。萬曆三十五年から天啓三年までは李卓吾の關與を謳う書籍がほぼ毎年刊行されているので、その時期にわざわざ約千五百箇所も李卓吾の名を削り取る必要があったとは思えない。天啓五年の時點で李卓吾著作が長らく當たり前に流通していたからこそ改めて禁令が出されたのだろう。最初の禁令も五年で効果が切れたようだし、表3からは漏れているが崇禎四年に「倣李禿老批評」と謳う閩齋堂本が刊行されているから、天啓五年の禁令が効果を發揮したのは長く見積もっても崇禎四年までの六年間だろう。李卓吾の名が削られた廣島丙本の初印はこの期間と推測される。

なお、容與堂本『水滸傳』にも李卓吾の名がほぼ全て削り取られた残本が存在する。これも丙本と同時期の處置であろう。『三國演義』にも筆者未見ながら吳觀明本の李卓吾の名を「陳眉公」に變えただけの版本があるというし（金註（5）項目）、崇禎本『金瓶梅』が李卓

吾評本四大奇書の條件を(一)〜(七)まで充たしながら李卓吾の名だけは謳わないのも、或いはこの禁令の影響かもしれない。天啓五年の禁令は、李卓吾評本四大奇書の流通にも實際にそれなりの影響を與えていたようだ。

しかし、崇禎年間には『西遊記』の内閣李本や北京大學本『水滸全傳』などが刊行されているほか、寶翰樓本『三國演義』や興野李本も崇禎後期の印行と推測される。明朝最末期には禁令は最早全く效力を失い、李卓吾評本四大奇書は大量に流通していたと思しい。

三三三、出版關係者による推定

以上の推定刊年は、題辭の署名・圖中の刻工名・一部の封面の書肆名と矛盾を來たさないだろうか。最後にそれを確認しておこう。

まず、甲本・乙本の題辭を書いた袁于令は、李卓吾評初刻本が出版されたと思われる萬曆三十年代後半にはまだ十代の若輩で、卷頭を飾るほどの文名があったとは思えない。逆に、崇禎癸酉（六年、一六三三）序刊の『劍嘯閣批評祕本出像隋史遺文』は袁于令自作の章回小説だし、やはり袁于令の作品『西樓夢傳奇』の上演を祁彪佳が崇禎五年から九年にかけて三度も見ている（『祁忠敏公日記』）など、崇禎年間には袁于令は通俗文壇の賣れっ子であった。となれば、袁于令の題辭を卷頭に掲げる甲本は、やはり崇禎刊本だと考えるのが相應しかろう。次いで圖中の刻工名だが、劉升伯は泰昌天啓間の朱墨套印本『牡丹亭還魂記』に、郭卓然が天啓七年序の葉敬池本『醒世恆言』や天啓崇禎間の袁于令撰『劍嘯閣自訂西樓夢傳奇』等に、湯維新は崇禎三年序の金閩徐含靈刊本『翰海』にそれぞれ名が見え、劉君裕に至っては萬曆末から崇禎年間の全般に活動が確認出来る。この四人が揃って参加

した甲本が崇禎刊本だという推定にも問題はあるまい。なお、康熙三十五年（一六九六）の序を持つ清刊本『西遊眞詮』の初期の版本である十行二十二字本（これにも複数の版がある）の中に、奥野李本よりも更に損傷が進んだ甲本の版木で刷られた圖を持つものが、管見の及んだだけでも三本ある。いずれも圖の紙は序目や本文と均質なので、刊行者が甲本の版木を入手してその圖を流用したものに違いない。

ところで、廣澤註（9）論文は劉君裕の名が見えるものこそ「李卓吾評本の初期版本」だと推定している。しかし、笠井註（7）論文で北京大學本『水滸全傳』が崇禎刊本だと示され、今また『西遊記』甲本も廣島丙本を重刻した崇禎刊本だと判明した。となると、劉君裕の関わった李卓吾評本四大奇書は、むしろ新たな圖を附すのを目玉とした第二世代のそれなのではなからうか。『三國演義』の劉君裕本と吳觀明本の関係のより詳細な検討を俟ちたい。

残る封面の書肆名だが、淺野李本の「書業堂」は前述の通り萬曆から清代後期まで息長く活動した蘇州の書肆で、年代の特定には繋がらない。なお、版面の風格や、袁于令・郭卓然・劉君裕らの關與した小説戯曲が多く蘇州刊本であることなどにより、甲本も蘇州刊本と推測されていることを付言しておく。

パリ李本の「金陵大業堂」については、『孫目』が萬曆四十年の金陵大業堂刊本を二つ擧げることから、太田氏はパリ李本もその頃の刊と推定する。しかし、『孫目』の擧げる片方は實際は刊年不詳だし（註（1）拙稿参照）、瞿冕良註（17）書は金陵大業堂を萬曆期の周希旦と周如山の書肆としつつ、清代にも子孫が活動していると言う。従って、乙本は早くても崇禎刊本で清代に下る可能性もあるという推定も、金陵大業堂の活動年代と矛盾しない。大業堂には出來合いの版

『李卓吾先生批評西遊記』の版本について

木を入手して書肆名のみ差し替えて出した小説があり、パリ李本も他本との封面の相違を見るにその口かと疑われる。しかし、前述の通りパリ李本は乙本の中では印刷が早い部類らしい。この問題は今後の課題としたい。

結論

以上、(一)李卓吾評本『西遊記』の初刻本は萬曆三十年代後半の刊行と考えられ、「批點西遊記序」と「寔言」を兩方持っていたらしいこと、(二)丙本の版木は世徳堂本を直接参照した痕跡を留めており、李卓吾評初刻本のそれである可能性が極めて高いこと、(三)現存の丙本は共に天啓五年の李卓吾著作への二度目の禁令を受けて版木からその名が削り取られた「廣島丙本」であり、その中でも刷りが遅いものであること、(四)甲本は廣島丙本を底本とした崇禎年間の重刻本であること、(五)乙本は眉批を全て傍批に變えた以外は甲本の覆刻で、清刊本の可能性もあること、(六)閩齋堂本が依據した李卓吾評本は現存の丙本より印刷が早いものであること、(七)清刊本は主に甲本・乙本系統から出たこと、などを示した。今後は従来のように李卓吾評本『西遊記』を一括りにすることなく、研究目的に応じて使い分けるようにすべきであろう。

註

(1) 現存四本のうち三本は建陽の熊雲演による覆刻本で、残る淺野世本も世徳堂初刻本そのものではない。拙稿「世徳堂本『西遊記』版本問題の再検討初探―他の世徳堂刊本小説・戯曲との版式の比較を中心に―」

〔東京大學中國語中國文學研究室紀要〕第一二號、二〇〇九、<http://hdl.handle.net/2261/28121> 参照。淺野世本は前半を缺くため、本稿では断りの無い限り熊雲演覆刻本に属する故宮世本を用いた。

(2) 太田辰夫『西遊記の研究』(研文出版、一九八四) 十四「明刊本西遊記考」(初出は『神戸外大論叢』一九卷一號、一九六八) 参照。

(3) 吳聖昔「李評本二探」(『西遊記』版本秘録之二) (『明清小説研究』一九九五年第二期)。甲本・乙本とも影印本のみにより検討している。

(4) 孫楷第『中國通俗小説書目』(以下「孫目」と略稱) が初版(國立北平圖書館、一九三三)・改訂版(作家出版社、一九五七)・重訂版(人民文學出版社、一九八二)のいずれにおいても甲本と丙本を同版扱いして區別しないためか、丙本は日本以外では殆ど知られていない。

(5) 名稱は石昌渝主編『中國古代小説總目・白話卷』(山西教育出版社、二〇〇四)の金文京擔當「三國志演義」項目による。

(6) 數種の異版が存在することが知られる。高島俊男『水滸傳の世界』(大修館書店、一九八七) 十三「一番いいテキスト」参照。

(7) 容與堂本とは異なる共通の批評を持つ二百二十回本各種と不分卷百回本各種は、互いに覆刻の關係で繋がっている。笠井直美「北京大學圖書館藏『忠義水滸全傳』——『萬曆袁無涯原刊』情報の一人歩き」(『名古屋大學中國語學文學論集』第二輯、二〇〇九) 参照。

(8) 崇禎本『金瓶梅』は(一)~(七)は充たすので、これに準ずる性格のものと見ても良いかもしれない。また、管見の限り四大奇書以外の章回小説には(一)~(八)を全て充たす版本は無い。

(9) 廣澤裕介「明末江南における李卓吾批評白話小説の出版」(『未名』二四號、二〇〇六)。

(10) 目録と本文内とで回目が完全に一致する『西遊記』の木版本は管見

の限り他に無い。なお、寶翰樓本『三國演義』は「李卓吾先生批評三國志眞本」と題し、他の李卓吾評本とは圖も眉批も異なる新種の版本である。してみると、その流行と同時期に甲本の版木を手に入れた書肆が、最低限必要な修版や補版を行った他に、それにあやかうと目録だけは完全に改め、新版に見せかけて印行した後修本が奥野李本なのだろう。西陵天章閣刊本「李卓吾先生批點西廂記眞本」に崇禎十三年の序があるので、寶翰樓本と奥野李本もその頃のもののだろうか。

(11) 目録は内閣李本と同系統で、傍批の數も内閣李本の眉批より約一四%少ないが奥野李本の眉批よりは多い。一方、本文の字句が内閣李本と異なり奥野李本と一致する箇所が複數ある。よって、乙本の底本は内閣李本より後かつ奥野李本より前に印行された甲本と思われる。

(12) 田中巖「西遊記の傳本」(『横濱大學論叢』八卷人文Ⅲ號、一九五七)。
(13) 磯部彰『西遊記』資料の研究』(東北大學出版會、二〇〇七) 第七章「明末清初『西遊記』諸刊本と繪畫について」。

(14) 李時人『西遊記考論』(浙江古籍出版社、一九九二) 所收。

(15) このほか、李時人註(14) 論文は「英國大英博物館也藏有一殘本、僅存三、五、八、十三等卷」とも記し、最新の曹炳建『西遊記』現存版本系統統録』(『淮海工學院學報(社會科學版・學術論壇)』第八卷第一期、二〇一〇)も原本未見のままそれを踏襲する。Robert K. Douglas『Supplementary catalogue of Chinese books and manuscripts in the British Museum』(the British Museum, 1903) 六〇頁「邱長春」の作として「西遊記 Se yew ke. "An Account of the Adventures of Heuen Tsang in the West" [1750?] 8°. 15271c.13. Imperfect, containing only Keuen 3, 5, 8, 13」と著録されるもの(筆者未見)を指すと思われるが、ここからは李卓吾の評があるとの情報は読み取れない。李時人註(14)

論文は中國國外所藏の版本は大半を未見のまま著録しているため情報に誤りが非常に多いのだが（その多くは日本語の読解力の限界によると思われる）、もしこれが正確な情報であれば、分巻本ということは甲乙丙のいずれでもありえず、閩齋堂本か未知の「李卓吾批評」系版本かのどちらかである。また、『東城書店目録』一二五號（二〇一〇年十月）に「李卓吾先生批評西遊記圖二冊、目錄十一丁、圖九十九丁」が掲載された。掲載の書影一枚を見る限り甲本か乙本の圖のようだが、既に買われており未見。二〇〇九年八月に孔夫子舊書網の在線拍賣に封面に「道光七年重鐫」「吳承恩先生原著／李卓吾先生批評」等と記すものが出品されたこともあるが、道光刊本が吳承恩原著と記すことを怪しむまでもなく、中州書畫社影印本に黒で刷られた歷博李本の路工の藏書印が巻首にそのまま見えており、明らかな贋作であった（<http://www.kongfz.cn/detail.php?fb=his&itemId=3249108>）。

(16) なお、吳聖昔註(3)論文は『明清善本小說叢刊』所收影印本と中州書畫社影印本を比較して、前者の版本に大幅な補刻を施した上での後印本が後者だと結論している。影印本のみによるため同版か異版かの判定が難しかったのだろうが、實際は間違いなく全葉が異版である。

(17) 瞿冕良『中國古籍版刻辭典(增訂本)』(蘇州大學出版社、二〇〇九) 参照。

(18) なお、金註(5)項目や廣澤註(9)論文が吳觀明本に先行する可能性があるとすると劉君裕本の圖は、細部の意匠は時折異なるが構圖は全て吳觀明本と同じで、どちらが周曰校乙本または同丙本を直接参照した先行する圖なのかは俄かには判じ難い。劉君裕本には第三章でも觸れる。

(19) 梁瀛嫻『李卓吾先生批評三國志真本』(寶翰樓本)の挿繪について「合戦場面の圖を中心に」（瀧本弘之編『中國古典文學插畫集成』(六)・

『李卓吾先生批評西遊記』の版本について

全相平話五種／三國志演義(寶翰樓本)』所收、遊子館、二〇〇八) 参照。

(20) 三槐堂本は雍正三年刊本だし、藜光樓本も刊年未詳ながら本文の系統上は康熙刊の綠蔭堂本より新しいと見られている。中川諭『三國志演義』版本の研究』(汲古書院、一九九八)及び金註(5)項目参照。

(21) 理論上は他に「丙本はDの形の李卓吾評初刻本を一旦そのまま重刻し、後からAの形に改めたもの」という推定も出来るが、重刻時に放置したものをわざわざ後から改めるとは考えにくく、可能性は低からう。

(22) 但し、清代に新しく編まれた唯一の文繁本『新説西遊記』には丙本と一致する箇所が多い。この問題については別稿で検討したい。

(23) いずれも十回ごとに書名は記すが、そこで巻を分かっわけではなく、あくまで不分巻である。丙本初版も同様であつたらう。

(24) 第五十二回第三・四葉は一枚の版本の表裏に彫られたもの。第九十一回第六葉の版木の裏面だったはずの同第五葉は、⑨⑩とも缺葉。

(25) この推測は、甲本には備わる事項が⑨⑩に共通して缺ける例が他にもあることから裏付けられる。例えば、⑨⑩は第七五・八十一・八十五・八十六回の回末總批を缺くが、甲本・乙本・閩齋堂本は前二者には總批がある(閩齋堂本の第八十一回總批は甲本より一文少ない)。後二者は缺く甲本が前二者のみを補ったとは考えにくいので、⑨⑩より早く刷られた廣島丙本には前二者があり、それが甲本の底本となったのであろう。⑨⑩の前二者は甲本では文字が見える行が空白なので、丙本の版木には李卓吾の名が削られた後にも更なる削除があつたと分かる。

(26) 井上進「明末の避諱をめぐる」(『名古屋大學東洋史研究報告』二五號、二〇〇一) 参照。

(27) なお、總批は丙本の文字を引き継ぐ上、丙本の「出」を「由」に誤る箇所まである。また、泰昌帝の諱「常洛」は甲丙とも避けぬ。

- (28) 原文「數年前、溫陵事敗、當路命毀其籍、吳中錢藏書板竝廢。近年始復大行、於是有李宏父批點『水滸傳』『三國志』『西游記』『紅拂』『明珠』『玉合』數種傳奇及『皇明英烈傳』、竝出葉筆、何關於李?」。
- (29) 林海權『李贄年譜考略』增訂版(福建人民出版社、二〇〇五)所收。
- (30) 原文「天啓五年九月、四川道御史王雅量疏、奉旨、李贄諸書、怪誕不經、命巡視衙門焚毀、不許坊間發賣、仍通行禁止。而士大夫多喜其書、往往收藏、至今未滅」。
- (31) 上海圖書館藏。第五十一回途中から第五十五回途中までのみ存。『古本小説集成』に影印を収める中國國家圖書館藏本と同版の後印本だが、回首題は全て行頭から空白無く「水滸傳卷之〇〇」に改刻され、回末題の「李卓吾先生批評忠義」と版心題の「李卓吾批評」、及び回末總批の「禿翁」「李和尚」「卓吾」が全て削られて空白になっている。
- (32) 瞿冕良註(17)書、金註(5)項目、廣澤註(9)論文、笠井註(7)論文、李國慶『明代刊工姓名索引』(上海古籍出版社、一九九八)など参照。
- (33) 『孫目』、蘇興「談《李卓吾先生批評西遊記》的版刻」(『文獻』第二期、一九八六)、李時人註(14)論文など参照。
- (34) 註(1)拙稿参照。また梁註(19)論文が封面に「李卓吾先生評次」「金閩大業堂藏板」等とあり圖のみ残る『三國演義』残本を挙げ、寶翰樓本の版木の流用とみなす。金陵と金閩(蘇州)の兩大業堂の関係は未詳。
- (補註) 校正の最中、曹炳建氏より國圖李本を閲覽したことがあるとのこと知らせを頂いた。眉批は無く行間傍批形式だったので乙本ではないかとのこと。計三十二回分が残るが、その中にも所々缺葉があるという。更に、最近韓國で乙本が一つ発見されたとのこと教示も頂いた。本文で觸れた六本と併せ、既知の乙本は計八本ということになる。